
花、花、花

菜乃葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花、花、花

【Nコード】

N5423C

【作者名】

菜乃葉

【あらすじ】

明治時代初期、売られていく少女の思いでの話。少女の心に残っているものとは…… 加筆修正しました。

（前書き）

これは、人買いをイメージして書いたものです。

そういう話が苦手な方はご遠慮ください。

あくまでも明治初期のイメージで書いているので多少おかしくても許してください。

勝ってうれしい はないちもんめ

負けて悔しい はないちもんめ

もんめ もんめ はないちもんめ

あの子が欲しい あの子じゃわからん

この子が欲しい この子じゃわからん

相談しよう そうしよう

「こっちへおいで。一緒に行こつ」

売られることなど気づいていました。

それでもついて行ったのは、家族が嫌いだったわけでもなく、ただ最後くらいは家族のためになりたかったからです。

私の家は親戚中で一番の貧乏でした。

それなのに、子供が三人もいたから肩身の狭い思いをしていました。

食べ物もなく、着るものもないそんな生活をずっと続けていました。

それでもみんな仲良く過ごしていたのです。

ただ、私だけをのけ者にして。

姉は初めての子供で『無事に産まれてよかった』と歓迎されました。

た。

弟は男の子として生まれてきたのでとても喜ばれました。

けれど私は男の子でもなく、二番目の女の子で周りからはがっかりされて生まれてきた子供でした。

親戚の人達にも親の陰口を言われ、私の陰口を言い、ののしって冷たい目をこちらに向けてきました。

しかし、待望の男の子が生まれました。

親戚の人達は大喜びです。宴会だって開きました。それから親にはなにも言わなくなりました。

そのかわり、私の親はいつのまにか親戚の人達のような冷たい目で私を見るようになったのです。

姉は器量もよく美人だとみんなにかわいがられていました。

弟は幼いながらも畑仕事を手伝おうとしていてえらいとみんなからほめられていました。

私はいつまでもみんなにとってただの邪魔者でしかありません。

実の父も母も私を見ようとはしてくれませんでした。

悲しかったです。苦しかったです。

“ねえ、なんで私はみんなに嫌われるの？”

“私、何かした？”

“二番目に、女の子に生まれてきてはいけないの？”

私の心は毎日張り裂けそうな思いでいっぱいでした。そんなときでした。子供を売ってはどうかだろうか。そう言う話が出てきたのです。

私の家は元々貧乏だったので生活に困っていました。親戚から借りていたお金もつきてしまっていて、途方に暮れていました。そうしてでてきたのが子供を売るという話でした。

売る子供なんて決まっています。『私』です。

私に伝えてしまうとだだをこねてしまうかもしれない。伝えないでおこう。そう決まったようでしたが、隠そうとしたって分かってしまうものです。

最初は逃げ出そうかと思いました。でも結局やめました。

気が変わったのです。最後までいはいは『あの子は最後には役に立ってくれた』そう思って欲しかったんです。

そして私は売られていきました。

昔の記憶に残っているのは『はないちもんめ』と河原一面の『ヒガンバナ』。

そしてあの日初めて会ったあの人の『金色の髪』。

それは花びらの竜巻。そして風がやむと紅い、紅い雨となります。それに合わせてあの人の髪も空を舞いました。

その景色はとても幻想的でした。夕焼けにあの人の髪がきらきらと金色に光り、風にヒガンバナの紅い花びらが舞、空に浮かんでいるのです。

一面『紅』の世界に浮かぶような、太陽のようなあの人の『金色』はこの世のものではないほど美しかったのでした。

私は私の『心』をそこにおいてきました。そうしないと私は私を保つことができなかったのです。

私の中には今までにない醜い感情でいっぱいになってしまったのですから。

“なぜ姉は愛されているの？”

“なぜ弟はかわいがられているの？”

“なぜ私はさげすまれるの？”

“私は悪いことなど何もしていない！”

“『はないちもんめ』でも売られていく人は相談で決められていくのに私は相談すらされないの！？”

“……神様、なぜ最後にあんなにすばらしい景色を見せるの？”

“せつかくこの家に、この町に、この世界にやつと諦めがついたのに。”

“ねえ、なんで！？　なんでなの！？”

だから捨てました。二度とこんな思いをしないために、私が私であるためにはこうするしかなかったんです。
そしてぼんやりとする頭で思いました。そういえばヒガンバナの花言葉は【悲しい思い出】だったということを。

「勝ってうれしいはないちもんめ。負けて悔しいはないちもんめ。もんめ。もんめ。はないちもんめ。」

あの子が欲しい。あの子じゃわからん。この子が欲しい。この子じゃわからん。

相談しよう。そうしよう」

「懐かしいな。その歌は」

「エリックさん」

あの後私を買ったのは外国人のエリック・ハンストンさん。
エリックさんはとても優しく、引き取られた私は幸せ者だ。とよく言われます。

けれど私は本当に幸せなのか分かりません。

ただ一日一日を、毎日を同じように過ごすだけです。

昔私はここに引き取られてこの歌ばかりを歌っていました。それが唯一私の知っていた歌だからです。

せめて自分が自分であって生きていきたかったからです。

そのために喜怒哀楽という感情を捨てたのですから。

「懐かしいときみは思わない？」

「いいえ。思ったことなんてありません」

そういうとエリックさんは悲しそうな顔をしてしまいました。しかし、

「そうだっ！きみの所にきたのはきみを連れて行きたいところがあつたんだ」

と顔を輝かせて言いました。本当にこの人は感情表現が豊かだと思えます。それでも私は『うらやましい』とは思えませんでした。そしてエリックさんは私の手をとってどんどん進んでいくと、そのまま馬車に乗ってしまいました。

「どこに行くのですか？」

「それは秘密。」

そういつていっこうに教えてくれる気配はありません。

馬車に乗ったエリックさんは始終笑顔でこっちを見てきます。馬車の窓は外が見えないようにしてあってどこを移動しているの

か見当もつきません。

しばらくすると河原のところで馬車が止まりました。

エリックさんは私の手をとったまま降りていきます。そして降りた先は

「うわぁ」

そこはいつかの一面のヒガンバナが咲いているところでした。

私の記憶そのままで、まるで時が止まっているようなそんな感じが漂っています。

あの時の夕焼け、風にヒガンバナの紅い花びらが舞、空に浮かんでいます。

あの時の花びらの竜巻。そして風がやむと紅い、紅い雨となります。

一面『紅』の世界が広がっています。そしてそこに浮かぶのは、

あの時の金色の髪。そう、エリックさんの髪です。

「あれ……？」

私の視界はぼやけてきました。そこで初めて自分が泣いているのだと私は知りました。

「やっときみの感情らしき感情を見ることができたな。道のりは長かったよ」

最初、私はエリックさんがなにを言っているのか分かりませんでした。

しかし自分の頬を触って熱い涙を触ったとき自分の『心』が帰ってきたことに気づきました。感情を捨てていたはずなのに、この心の中に今までのすべての感情がはいつていることに私は驚きました。そしてそれに気づくと、感情が止めどなくあふれてきてもうどうしようもなくなってしまうました。一度動いた感情を止めることはもう出来ません。

おねがい、わたしのなまえをよんで。

辺り一面が濃い紅に染まります。

まるで私の心に反応するようにヒガンバナの花びらが一斉に空へと舞っていきます。

目の前はむせかえるほどの花、花、花。

そしてあの人は

「こっちへおいで。椿^{つばき}」

私の言っただけの言葉を言ってくれました。

私は、彼の方へと走っていきます。愛しい彼の元へと、出せる力を全て使います。

私は、思いつきり抱きつきました。彼と距離を離したくありませんでした。ほんの少しでも離れたくなかったのです。

私の中はもう『エリックを愛している』というその感情でいっぱい、どうしようもありませんでした。

「エリックさん。大好きです」

私にはそう伝えるのが精一杯でした。

「僕も好きだよ、ずっと前からね。愛してるよ、椿^{つばき}」

彼はそう言って強く抱きしめてくれました。私の心は今までにないくらい満ち足りて、幸せな気分です。

きっと私はあの時、あの光景を見たときから恋をしていたのでしよう。

そしてヒガンバナは竜巻から紅い雨になって私たちを祝福するよ

うに花びらを散らしていきます。

「花も僕たちを祝福してくれているみたいだね」

そう言ったのでおもわず私は吹き出してしまいました。同じことを考えていたんだ、そう思ったら可笑しく思えてきてしまったのです。笑って笑いました。おもいきり。こんなに笑うことはもう無いと思っていました。

しかしエリックさんは私のその様子に不服そうで、少しむっとした顔をしていました。

「なにがそんなに可笑しい^{おか}」

「あなたと同じことを考えていたので気持ちはつながっていたのかな、と思ったんです」

花びらはまだまだ降り続いていきます。

「椿は前ヒガンバナは【悲しい思い出】という花言葉が本当に合うと言っていたけど、僕はそうはおもわないな」

「なんでですか？」

「知っているかい？ヒガンバナの花言葉には他にも【また会う日を楽しみに】という意味もあるんだ。祝福もしてくれたし、ヒガンバナ達は椿と会える日を楽しみに待っていたと思うんだ。僕はそっちの方が合うと思うよ」

確かにそうかもしれません。

「それじゃあそろそろ帰ろつか。みんな待っているかもしれないよ」

「では、また来ましょうね」

「ああ、何度でもいいよ。また来よう」

その帰る二人の姿は来たときよりも親密そうで、そして確実に二人の心がつながっていました。

さようなら【天上の華】

また会う日を楽しみに

（後書き）

花言葉を使ってみたくて書きました。

もし、ヒガンバナの花言葉が違っていたらご連絡お願いします。

加筆修正をしました。敬語だったのを普通に変えてみたのですが、
どうでしょうか？

感想を書いてもらえると嬉しいです^^

続編始めました。『花に捕らえられた心』

そちらの方もよろしく願います。

作者は正直花が大好きなので、花言葉ばかり使ってしまうす><

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5423c/>

花、花、花

2010年10月28日07時04分発行